

# さわさわ すすぐ



版画/松山市 K・Yさん

重信房子さんを支える会(関西)会報

4号

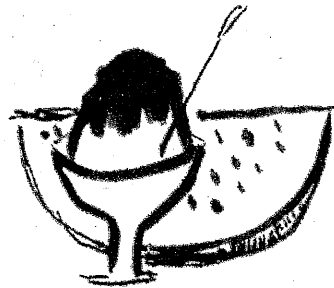
## 暑中お見舞い申し上げます。

いつもたくさんの励ましに支え、ありがとうございます。私の方は、6月30日で、上告趣意書を提出いたしました。判決は今年中だろうと言われていています。

アラブで、「ラクダが針の穴を通る」という風に、可能性が小さいことを表現します。奇跡とも言えます。私は上告審の前にそんな風にして立っています。

有限の時間を濃く楽しく、さわさわのみんなと、今もこれからも、共に過ごします。ホットな夏を10・21(10月19日)につなげていきましょう。

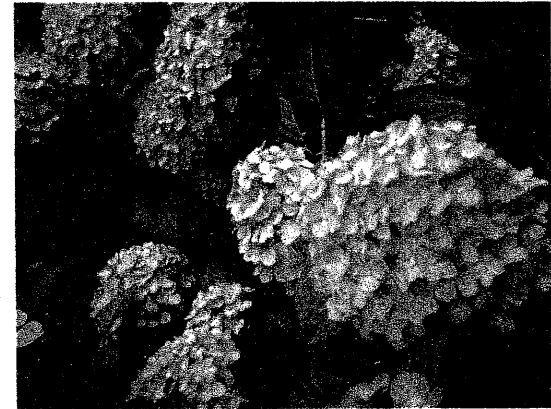
みなさんのご健勝を祈ります。 重信房子



【さわ】…「共に」「一緒に」を意味するアラビア語です。“さわ”一語でその意味がありますが、“さわさわ”と続けて言う言い方もよくされるそうです。音感が良いことから会報タイトルには“さわさわ”をいただくことにしました。

## ● 目次

- 暑中お見舞い申し上げます 重信房子
- 読者の皆さんへ 田川晴信
- 私の京都・大阪物語 重信房子
- 《 あい、れいのキューバ訪問記 》  
あい、れい、キューバへ行く 大森れい  
人がキラキラして 大森あい
- 周恩来への手紙……記憶の謎と謎の記憶 千田智之
- 訪朝記 牧野一樹
- 短歌で遊ぼう
- 俳句とわが人生(その1) おさしろまんり
- 短歌を語る 小嵐九八郎



## 《読者の皆さんへ!》

さわさわの旗をともにつくりませんか 田川晴信

いろんなデモに一人出かけて行きました。せめて、“否”の意思表示だけという想いで。何人かの顔見知りを見つけ、輪の内に入って行くのですが、

やりきれない虚しさを感じることも多く。まあ、“虚しさを抱きしめながら”、トボトボ歩くのも無意味ではないはずだと言いつけてはいますが。

一念発起！昨秋 10 月 21 日、“このままでええの？！日本と世界”と題し、京都円山で集会を、友人、知人に支えられ開催しました。久しぶりに出会う人たちが、ニコッと笑い、「来たぞ」、「来たよ」の声に、私は少しウロタエ、「ありがとう」と…、この返答、間違ってますよね…。何人かから、「どこに座ったらよいの」の声があり、「適当に、好きなところへ、」…。その時、「ここでいいんじゃないの」という場の提供（座りごこちの良い）が必要かと感じました。そこの一隅に「さわさわ」の旗を立てようと。

「さわさわ」もみなさんのご協力のおかげで、3 号まで発刊できました。どんな人たちが読んでいられるのか、私は、営業担当（？）を自任しているので、かなりの人たちを知っていますが、読者の人たちは知っておられません。そこに風がそよぎ、自然の交流が生まれたいいなと考えました。そして獄中の房子さんと「さわさわ」の絆が深まればなおよし！と。

旗は、色も含めて、房子さんにデザインをお願いしようかと。センスと詩情溢る彼女ですから、想いいれも含めて、布切れにその一端を表現してもらえるのではと。

最高裁の判決日に向けて作成できないかと。そして、その旗を最高裁に持って行こう！そして獄外に出られるまで、毎年一枚ずつ、作成を重ねていく。（旗の数が少ないほど良いのですが。）

今秋の 10 月 19 日、円山音楽堂には、その旗を立て、互いに見知らぬ読者同志の間に、新鮮な空気が“さわさわ”と流れる場にしてみたいと考えたのです。

旗を立て 見つめる<sup>もろ</sup>宙に 我もあり

追記：オリジナルの旗になるので、制作費が 5 万円くらいかかります。賛同の方は（同封の振込み用紙にて）カンパ（一口＝壱千円）お願いいたします。

## 私の京都・大阪物語（4）

重信房子

＜「前段階蜂起」から「国際根拠地」へ＞

赤軍派は、69 年秋の「前段階蜂起」の教訓として、「国際根拠地論」を路線化していきました。

1970 年 1 月の機関誌「赤軍」では、「国際根拠地、蜂起の軍隊、国際的地下組織の三つの教訓の物質化」として発表されました。日本での前段階蜂起の貫徹をもって、社会主義諸国の左旋回をつくりだし、それを革命根拠地として、更に日本の全面武装蜂起を目指すという話です。壮大な夢のような物語と、今は言えますが、「時代が書かした」という程、当時は若者の革命の願いと重なるロマンがありました。要は、日本一国では、革命は封じられるので、地方主義に甘んじている毛沢東や、北朝鮮、キューバなどを我々の正しい主張で党派闘争をしながら世界革命を拠点に日本の闘いを準備しようという主観的なものではありません。日本一国ではなく、海外の闘う者たちと連帯して、革命根拠地をもってこそ、日本の闘いも勝利し得るのだと、海外との関わりを重視していくこととなります。それが後に、淀号 H・J として闘われる論拠でもあります。

私自身は、「国際根拠地論」から、68 年の 8 月 3 日、ヒロシマの記念に中大で開催された国際反帝反戦集会の連帯を思い起こしていました。まだ、ブントが分裂する以前、この時から一年半ほど前に、当時国際反帝反戦集会に参加した光景です。アメリカからは、ブラックパンサーやウエザーマン、フランスからは、パリ 5 月革命を闘った全学連、ドイツからは、社会主義学生同盟・SDS など、ベトナム反戦を通して連帯していた帝国主義本国の活動家たちが中大に集い、みんなでスクラムを組んでインターナショナルを歌いあげたあの時をイメージしていました。そして、帝国主義本

国ばかりか、「社会主義」国や第三世界の闘う人民と、国境をとっばらって自由に連帯し闘うイメージを描きました。「いいなあ、国境取っ払い運動なんだ！」'68年は、その集会の体験の中でそんな風に考えていたものです。

当時の日本の 69 年秋の敗北的事態を受けて、何よりも海外での、国際根拠地形成の中から、更に闘いの条件を目指す方向が重視されました。国際根拠地形成は、世界革命の共同の場をつくる意義はありました。でも赤軍派が国際党派闘争をやって毛沢東や金日成を説得するという部分は、はなはだしい、自己中心、主観的願望の話です。アラブに行ってから、実際に、PFLPや、ソ連の人たち、ヨーロッパの人たちとの会合で、私が来た当初の赤軍派の「国際党派闘争の壮大な試みこの部分を説明すると、みな腹を抱え、涙まで出して大笑いし、うーんと唸るのでした。しかし当時は、現実の弾圧の困難を切り開く方向のように考えられました。今から考えると、大菩薩峠、前段階蜂起の総括として、日本における「武装闘争」という闘い方、それ自身を問われていたのですが、むしろ、武装闘争に向かって更に夢を描いていきました。近頃会う昔の仲間たちと、あの頃ブントみんなで、「諸君！故郷へ帰ろう！帰って、自分のことを子供の時から知っている人々と、その地で闘いの条件をつくろう」とやっていたら、根を張った民主主義の日本になっていたかな、などと語り合いました。「賢者は歴史から学ぶが、愚者は経験から学ぶ」などと言うけれど、今からだって、経験を歴史に返し伝える行動は遅くないと思います。人々が歴史から学べるように。でも当時、毛沢東や金日成をオルグするという野心でなく、その国の人民交流を基礎とするという論理だったらどんなによかったでしょう。実際アラブでは、それが問われていると、闘いの中から気づいていきました。

しかし、世界を夢見る赤軍派の実体は、組織的な機能は破壊されたままでした。赤軍派結成から即、差し迫った秋の闘いを準備し、結成から3ヶ月もたたずに大菩薩峠事件で、多くのカードルが、一挙に逮捕され、組織としても、弾圧に対抗する力が十分にはありませんでした。人民を組織す

る人民組織委員会（CPO）は、逮捕、弾圧で、指揮系統は壊れ、革命戦線として、各大学などで、自発的に活動していました。また、東大などの、公判を抱えたまま、「保釈逃亡」した人々は多く、人民軍事委員会の中心をなしていきました。

大菩薩峠事件の直後に逮捕された私も、12月始め、釈放された後、これまで以上に財政や、会議場や、アジトの確保に東京では追われていました。当時、自宅を貸してくれる人々は、脱走米兵を匿ったことがあるとか、山本義隆東大共闘議長を匿っていたとか、訪ねていくと、協力してくれる人は、わけへだてなく、革命に善意と好意をもって支えてくれました。それでも弾圧の中で、需要は大きくなるのに、それに対して、アジトや金を確保するのは骨のおれる活動でした。ことに、「保釈逃亡」に対して、収監状が出ている人が多くいるために、更に、会議の場所やアジトも、権力の尾行のないところで開催したり、地方から出てきたメンバーのアジトの確保は、かなり逼迫していきました。東京出身の私は、アジトの確保は東京出身者の義務と考えていて、小学校時代の友人や、文化人、新婚の兄や、姉の婚約者の実家、更には、逮捕された獄中で仲良くなった、東京出身者の、解放派の女性にも協力してもらいました。

でも弾圧の厳しさばかりか、私たちの仲間の、自供による発覚や、常識のない振る舞いや、マナーのない態度は、支える人々をがっかりさせ、貸してくれなくなることも多々ありました。私の家族もそうでした。ある日、兄から、「人民のため、働く者のため」とおまえが言うから家を貸したが、もう貸さない。中国革命では、針一本盗まなかったというじゃないか。おまえたちは革命のいろはも間違っている」と、電話で怒鳴られました。聞いてみると、貸した部屋を使ったあと、やりっぱなしの上に、勝手に洋服ダンスの中から、クリーニング済みの、Yシャツのビニールを引きちぎって失敬し、汚れたYシャツが放り込んであったというのです。あわてて謝りに行きました。こういうことをする人はすぐわかりました。「いやー、わしのYシャツがなあ、汚れていたんだ」と弁解していました。また、姉の

婚約者の家の、空いていた貸し店舗の一つを会議場所に借りた時も恥ずかしいことになりました。会議が終わった後もいつの間にかそのまま、「軍の兵舎」としてずっと使っていました。その上に、逮捕された者が、警察でも白状し、婚約者の家族も取り調べられて、大変迷惑をかけ、婚約破棄にならないかと、私の方は大あわてでした。私の家族のエピソードでもこうなので、他にもたくさん人様にご迷惑をかけ続けていたと思っています。借りては、あれこれの間違いで、謝ることも多く、場所の確保が難しくなったことと、人々に迷惑をかけると考え、ホテルを多用することにしました。赤軍派はまだ規約もないままでしたし、組織的な教育や、体系もありませんでした。それに赤軍派では、任務や課題、金がいくら必要ということが指示されても、それを実現する方法や条件は、その個人の裁量に委ねられます。個人が自分の能力、人脈を使って、自己犠牲的に目標を実現することに生きがいをもって進んでいましたが、弾圧に抗し、消費されていくばかりでは、消耗し、やめていく人も多くいました。獄中体験を経て、私は何とか集団的な力にできないかと思いつつ、私自身も手探りでした。私の個人人脈では、屋台骨を支えていけません。東京では、それでも何とか作れても、関西には赤軍派の数少ない仲間に限るしかありません。私の関西の活動すら、大阪ではWさん、Kさん、京都ではSさん、Fさん、Bちゃんら、何人かにいつも支えられていました。私自身が友人を広げないと…と思い、東京にいるTさんら関西出身の人たちに協力してくれそうな友人の名と、連絡先を聞いてもらいました。20人程の名前を持って、一人一人と会って、協力を要請しようと思いました。

#### <白樺の友人たち>

白樺の泰ちゃんと知り合ったのもその頃です。「彼は闘う人に対しては、足を引っ張らないけれど、赤軍派には、協力はどうかあ…。」7・6事件以来、赤軍派に対しては、ブントの人ほど批判的なのだと、京大のTさんから聞いていました。吉田山の中腹の少し坂道。ドアを押して入ると、Gパンに白いYシャツの細身、長髪、長身の彼がぎょろりと目を向けまし

た。見知らぬ客には店主がそんな顔したらアカンというような感じの第一印象でした。私は赤軍派の者であり、あなたは赤軍派はあまり感心しないと言っていたらしいこと、でも協力してほしくて来たことを率直に伝えました。そう言うと、笑いながら、「そうか…、何も話さんでもわかるわ。よっしゃ、わかった。とびきり大人で、役に立つもんがええな。紹介するわ。」と言いました。そのすぐ後に、白樺に来いと言うので、出かけると、「もうOKや。連絡しといたから。あんたから話したらいい。何でもOKやで。」と、Nさんの連絡先をくれました。「今日、待つとるはずや。」「じゃ、泰ちゃんも行ってくださいよ。」「そやな…、行くか…。」そしてNさんと会いました。以降、Nさんは私がアラブに行くときまで、(行ってからも)様々に協力してくれた人です。Nさんは詩や俳句、評論など、京大のサークルでも活動していたようでした。私がブントの活動前に現代詩や、清水昶の詩などに興味をもっていたのを知って、同志社のサークルと京大のサークルの交流の会があるから来ないかなどと誘ってくれましたが、「できませんよ！私は10・8闘争で、もう詩はやめたのですよ！」と言うと笑っていました。後に大阪の彼の事務所に赤軍派の人も出入りするようになりました。ある日、公安は正体不明のNさんを知る目的で、「さっき、そこで窃盗事件があった。あなたの人相、風体にそっくりなのでちょっと調べさせてくれ。」と交番に引っ張り込んで、強引に取り調べたりしました。Nさんは意に介さず、ずっと協力してくれていました。アラブ行きについても相談し、いろいろ協力してくれました。私がアラブに行った後、73年に夫人と子供を遺して癌で亡くなられたと聞きました。2000年以降、森本さんとの交流の中で、森本さんもまた、Nさんと親しかったことを知りました。

Nさんばかりではなく、泰ちゃんはあれこれ協力してくれて、昔からの友人のように私を遇って助けてくれました。フーコ！と呼んでビールを差し出す時にはいつも、紹介したい人や、気をつけろよという人が白樺にいました。私の隣に座った人が、新開さんだったこともありました。たぶん、京都の政治もわかっていない私が、一生懸命やってるからと助けてくれて

いたのかもしれませんが。泰ちゃん、Fさん、千田さん、みな暖かい人々でした。白樺にはいろんな友達ができました。また、赤軍派やブントの友人たちの中には、白樺で飲んでいる連中を嫌う人々もいました。私の知らない京都の政治風土の中で、赤軍派には批判的な人も、また、パルチザンとして闘った人も、先行きの見通しに悩んでいるひとも、入れ替わり、立ち代わり白樺に集まっていたようでした。ある日には、私の友人の女性Kさんが、何の理由か覚えていないのですが、常連の誰かと論争になり、ひっぱたいたことがありました。泰ちゃんは嬉しそうに笑っていましたが、Kさんの立命の兄貴も白樺によく来ていたらしく、「来るな！」と叱られたと、あの元気なKさんがしょんぼりしていたのを思い出します。泰ちゃんと話をする時は、白樺ではなく、京都の街に出て話しました。杉坂屋とか、向学のためにと、高級な店に、何人かでくっついて行ったこともあります。泰ちゃんのまわりには彼を慕う人も不満を持つ人もいました。どちらも泰ちゃんに何かを期待していたようです。アラブにいた時、奥平さんと話していて、泰ちゃんの話が出たことがありました。奥平さんは映画の「パルチザン前史」にも駆り出されて映っているようですが、「泰ちゃんは11・17までの人や」と言っていました。奥平さんも泰ちゃんの呼びかけで蒲田まで1969年11・17の佐藤訪米阻止闘争に上京して闘ったそうです。それが思惑通りにいかなかったようでした。そして、その11・17からその先を泰ちゃんは跳ばなかったと言っていました。もちろんそれは泰ちゃんへの批判としてではなく親愛の情で語り合ったものです。歴史的にそれが彼の選択として悪くはなかったと思いますが、「闘いたい！」と結集した人々にとっては、奥平さんのように以降は自身で、自分の闘い方を問うことになったのだと思います。

<ある日の大阪にて>

私は、関西のことは、表層しか当時知らなかったのですが、大阪では、Wさんをはじめ友人たちもいて、仲間と話すこと自体が、楽しい活動でした。だからちっともみな力にならず、楽しんでいただけだったのか

と、反省も多々あります。その大阪では、インテリでアジテーションのうまいWさんのパチンコのうまさに驚いたものです。私もパチンコを楽しみました。大阪の当時のエピソードとして思い出すのは、天下茶屋でのことです。大阪で会議をやると、田宮さん、Wさん、Tさんらに呼ばれて行ったのは、天下茶屋の商店街の路地を入ったところにある下宿屋のようなところでした。大きな玄関は、使い込んで黒光りのする古いもので、小学校のような大きな下駄箱が玄関にありました。当時私は大阪の地理もよく知らなかったのですが、労働者の安宿のようなところでした。会議は夜から始まって、5人で炬燵に足をつっこんで話をしていました。夜も更けて行ったのですが、だんだん声が大きくなり、そんな時間も状況も忘れて語っていたのでしょ。突然ガラリとドアをあけて「うるさい！今、何時だと思ってるんだ！何が労働者のための革命だ！労働者のためだったら、オレを寝かせろよ！いつまでグチャグチャ革命の話なんかしてるんだ！こっちは明日早いんだ！お前らみたいに働かないで偉そうなことを言える身分じゃないんだ！」と怒鳴られてあつけにとられてしまいました。みな、炬燵に足を入れたまま、Tらは下を向いてしまいました。「すみません。もう、やめます。」Wさんが急いで謝りました。「公安じゃなくて良かったね…！」と、恥ずかしい気分で、小声で、みんな顔を見合わせました。本当に…。社会の中で生きている実感より、いつも頭の中の革命に忙しくて、様々の計画の実現に夢中だったのでしょ。

<同志社への襲撃>

ある2月の寒い日、同志社の学館で、みんなと話をしていると、東京のTさんから連絡。何でも、今、叛旗派の連中が、バスに乗って、赤軍派襲撃のために、同志社に向かっているとのこと。何の為に、なぜ今頃、わざわざ東京から、バスツアーで、ゲバルトに来るなんて、あまりに唐突な話で、信じられません。「情報は確実で、襲撃隊の一員からの情報らしい。赤軍派のHさんが中大に拉致された時、見張り役の叛旗の奴と仲良くなっていて、そいつが言ってるから間違いない」というのです。今から思うと

「長征」と称して、赤軍派の軍事部門の軍事中央委員会（CPA）は「国際根拠地づくり」に向けて日本脱出計画を準備していたと思われます。責任者の田宮さんは、ちょうど、大阪にいました。その話を聞くと、「何！なまいきな！よし、山科のところで、迎え撃とう！」という方針を立てたとのことです。東名を通過して、山科インターチェンジを通過するはずだから時間計算してそこに隠れて待機せよ。そしてバスが通過したら、火炎瓶を投げるといふ方針を出したようです。それで、Mさんが指揮で、部隊は山科へと十数人が、出動する体制を取るとのことでした。ついては、夜中の中継を確保してほしいと私への指示が来ました。中継といっても同志社の大学や寮など盗聴されたTELで待機することはできません。軍事委のリーダーらは手配されている身分で、現場と直接TELを繋げば危険なので、中継をやってくれとのことでした。当時、Dさんらは既に逮捕されていて、私自身も釈放されて間がないので、京都を知っているわけではありません。

今から考えればムチャクチャな方針なのですが、既に部隊は出動するというので遅くまでやっている喫茶店を待機場所として、私が現場とTさんらを繋ぐことになりました。京大の友人と千田さんもつきあってくれて、雑談をしながら待機しました。（千田さんもそんな物騒な片棒を担がされていたと、当時知らなかったかも知れません。）とにかく、何時間も連絡を待ち、連絡が来たら伝えるという、不合理ながら、不可欠な役です。遅くまでやっているところはどこかと聞くと、「キャッツアイ」が、AM3:00までやっているというので、キャッツアイに行きました。千田さんが立命の民青に襲撃される危険があると言いながら、夜中の3時くらいまでいました。そして、それから、どこか明け方まで、喫茶店を転々と待機しました。その頃赤軍派の部隊は、残雪の東名ハイウェイの横にへばりついて、マイクロバスの到着を待っていました。6時過ぎ、もう、とっくに着いていい時間に、まだ通過しないようです。女性のKからTELが入り、「トイレも苦勞するわ、さんざんや！勝手な方針で、ほんまの話なんか？待機は

もういいだろう、ひきあげる。」と言います。その話をTに伝えると、「OK」で解散となりました。みな、徒勞と寒さと疲れで、同志社の学館に戻って、グーグーと寝ていました。

9時過ぎか、そこを襲撃されました。襲撃の話は本当でした。MさんとUさんら、赤軍の長征軍のキャップたちはそんなこともあろうと、棒を準備して寝たので、応戦し、大乱闘だったようです。機動隊も出動して、Mさんは逮捕されてしまいました。私は寮にいたのか、S君のところにおいたのか、襲撃の知らせを聞いて、駆けつけてみると、もう襲撃は終わっていて、Mさんが逮捕されたことがわかりました。そこに、知らない同志社の学生が、私に、「あなたはOOさんか？」と遠慮がちに私の組織名を呼びました。

「ついてきて。匿っている人がいる。」と言うので、彼についていきました。誠実そうな感じの人でした。歩いて少し行くと、京都の、とっても伝統的な旧家が自宅だと言い、中庭を通って行くと、手配されているUさんがいました。「叛旗はやっぱり来たよ。何のためか知らんが襲撃してきた。もうチャンバラや。機動隊も来て何人かやられた。ぼくは逃げたらこの人が、こっち、こっちと匿ってくれた。」とのことでした。その学生のことは、今も忘れられません。京都の旧い家って、こんな風になっているのかと、珍しくて、キョロキョロしました。母親は、息子の友人と思って、優しく、御茶やお菓子をふるまってくれました。名前も忘れたけれど、きっと、同志社社会学同のシンパの一人だったのでしょう。

今も、あの時、何で叛旗がそんな遠い距離を襲撃に来たのか、さっぱりわかりません。この事件の結果、Mさん、Uさんらは、「長征軍」（後のハイジャック部隊）にむやみに、内ゲバの動員をかけられたと反発して、長征部隊から撤退していくことになりました。

11・4「大菩薩峠」の大量逮捕後、軍は、国際根拠地の設営を、現実的な活路として、日本脱出へと、計画を立てていたようです。その過程で、部隊をリクルートする「長征軍」は、こうした矛盾を抱えながら進んで行ったのです。

当時は、私たち赤軍派のみならず、日共民青も、ブントも、叛旗派も、他の人たちも、みな自分にとっての「正義」を主張し、「正義」の実現に意見の違いを認めることをしませんでした。他の集団に対しては、壊しにかかる風潮がありました。こうした、「正義」や「是」を独占したがる考え方は、排他的な内ゲバを生みました。ことに、スターリン以来の「一国一党」の考え方には、「唯一の前衛党」や「党の無謬性」を主張する構造が準備されていました。社会全体から見たら、当時の学生層は、いわば「裕福」な家庭に属しており、社会全体を揺るがせたというわけではありませんでした。それでも、社会全体は、政治や社会問題を問う空気に満ちていました。そこから、どう、人々とともに闘うのかという回路を私たちは持ち得ませんでした。その、持ち得ない自己を問うよりも、「使命感」に燃えて、戦術を急進化させ、時代のイニシヤチブを取ろうと必死だったのでしょう。そして、良心的で、戦闘的な学生たちは、東大、日大、京大と続く、権力側の、暴力的解体に対して、武装闘争を一つの正当な闘いとして、ますます、真剣に考えるようになっていきました。それらは、赤軍派などへの参加の他にも、赤軍派の稚拙さを批判しつつ、黒ヘル、パルチザン軍団など、独自の闘いを生み出しつつ進んでいきました。この国を変えたい！自分の力で「正義」を実現したい！との思いの溢れる季節だったのです。

<生田耕作先生のこと>。

ある日のこと、ハイジャック闘争の前の頃だと思えます。泰ちゃんの仲間と京都で待ち合わせました。指定されたのはもうどのあたりだったか思い出せませんが、ビルの中にある「ゲリラ」という、小さな、カウンタースナックバーでした。私にとっては初めてのところで、探しながら、ビルの何階かにあった、そのバーのカウンターにたどりついて腰掛けて、友人を待ちました。私の左には少し太めの、金髪の女性が座っていました。当時の日本人は髪は黒く自然のまま、染めている人はごくまれだったのですが、その日本人は本当に金髪でした。「東京の人でしょ？」と彼女が話してきて、二人で言葉を交わしていました。右手の方の、二人の男が大声に

なって、一人が酒のせい、泣いてたか、大声で騒いでいました。どうも、自分が「もてない」と、しきりに年上の男の方に訴えているようでした。私たち女性の方に、年上の男の方が、声をかけてきました。「どう思います？この男、もてないと、クサッてるんだけど、いい男だと思いませんか？！」などと言いました。そんなこんなで、4人に、カウンターの中の若いマスターも加わって、何がもてるのか、何がもてないのか、問題は人間の中身だなどという当世の、見映えがいいことか、心根がいいことか、などと、話をしていました。そのうち、あなたは、何している人かと聞くので、黙っていました。年上の方が「わかりました！当ててみましょうか？！ストリッパーでしょ？！」と言うではありませんか。びっくりしたけど、笑って、「あら？！よくわかりましたね！」と言い返しました。そのうち、TELが入って、約束の友人は、どうしてもそこに行けないので、他の店に来てほしいということだったので、私はみんなと別れて、そのバーを出ました。「ゲリラ」という名だったので覚えています。ゲバラだったかもしれない。

翌日は、紹介された名簿に載っていた京大の先生方に、逮捕された京大生の救援のためのカンパや、協力要請や、挨拶をかねて、行くことになっていました。野村先生の研究室で協力してもらい、次に、生田先生のいるという室をノックしたら、出てきたのは、昨日の「年上の男」ではありませんか！「え？！生田先生って…え？！」という気分で、私はびっくり。友人が「赤軍派の人です」と私を紹介すると、先生もびっくりされて、ニヤニヤ。「ヤー！昨日は失礼。そうか…、昨日、ストリッパーなんて言っちゃったね。それはね、君の隣にいたあの女性が、有名なストリッパーなんですよね。それで一緒にいたので、そうかと聞いたら、違うと思ったのに、そうだと自然に答えたから…。騙されたな…。」などとテレながら言い訳していました。「そんなわけでカンパしない訳にはいかないな…。」と、カンパをしてくれました。以来、遊びに来いと言うので、京都に行った折に、ご自宅にお邪魔したこともありました。ステキな夫人がいらして、自宅に、



土方巽の踊りの一団が泊まっていたり、ワイワイしていました。穏やかで素敵な先生でした。

反省すべきことは多いのに、どの苦い思い出も懐かしく笑えるのは、当時の仲間たちの暖かい友情と支え合いを変わらぬもののように思い返すためでしょうか。

風孕みうねる赤旗みあげつつ  
インター歌いてスクラムを組む



## 《あい、れいのキューバ訪問記》

☆あい、れい、キューバへ行く

大森れい

「ああイライラする…」仕事が終わらない。「あれもこれもやらなきゃ」明日も仕事。「人生って何だろ?」「幸せって何だろ?」日本人ならふっと想うことだろう。いつもそんな壁にぶつかるけれど壊すことはできない。毎日、何のためにかかわらず働く。人生って何だろ…。そして人々は働くことが人生だと思いこんでしまう。さあ日本の話はおいといてキューバの話しよう。

みんな!カリブ海にうかぶ島国キューバを知っているだろうか?私が初めてキューバを知ったのは小学生の頃。うちの家族が百姓ってこともあって、有機農業を国をあげておこなっているキューバにはひかれるものがあった。野菜の自給率はほぼ100%だとか、本も読んだりした。チェ・ゲバラのことも知った。うちの姉・ちえ(21)はすごくチェのことが好きで、いろいろ話は聞いていた。カッコイイ人だなんて思ってた。

そのころ、双子のあい(18)とちえちゃん(21)3人で行こう、と言ってい

たが、ちえちゃんは19歳の時、「10代のうちに行きたい」と言うときっさ行ってしまった。そしてこちらは17歳になったころ、キューバに行くくらいのお金はたまっていた。(お年玉やちょっとしたバイトで)。そんな時、大阪から帰ってきたあいが「うちキューバに行く」と言う。手には「チェ・ゲバラ40周年記念国際ブリガダ」の参加の呼びかけのチラシを持っている(ブリガダ=ボランティアの意)。今年10月9日(キューバでは8日)、チェ・ゲバラがボリビアで殺されて40年ということで、キューバ政府の友好協会ICAPが主催で10月1日~15日までチェ・ゲバラのことを学び、農作業の手伝いなどおこなうというものだった。

私も参加したいと思い2人で1ヶ月ほど行くことにした。でも家族は「こんな稲刈りでいそがしい時に!スペイン語も英語もしゃべれないで!」みたいな感じだった。でも私は行くと決めた時から楽しみで楽しみでしかなかった。早く、早くキューバに行きたい。家のことも忘れてた。あいは会う人会う人に「うちキューバに行くんだ!」と言う。でもみんな「キューバ?大丈夫なの?」アメリカからの情報しか頭に入っていないのだろうか?日本で変な国だな。全く正反対のことを言うし、いつも矛盾だらけ。そんな中、私たちはキューバへ行く。

関西空港→カナダ(一泊)→キューバと日付変更線を越えての長い空の旅を終えてキューバ、ホセ・マルティ空港に着く。空港にはICAPのアジア担当のリコベルトさんが迎えに来てくれていた。今にもこわれそうなボロボロのスクールバス。大音量で流れる音楽。ワクワクとドキドキで顔はにやけてしまう。ハバナから40Kmある田舎グヤバルに向かう。窓から外を見るとオープンな家。家の中はまる見え。テレビを見ている人、椅子に座って本を読んでいる人、葉巻を吸っているおじいちゃん。キスをしているカップル。手を振りながら笑顔でジャンプしてくる子供たち。みんなほぼ裸に近い服装(笑い)。窓から入ってくるキューバの風がきもちいい。

グヤバルの国際キャンプに付くと、そこの管理係のおじいちゃんが私たちに「子供だね」と親しみをこめた優しい表情で言った。おじいちゃんはいつも犬

と一緒に掃除をしている。人はだんだんと集まり、35 カ国以上の国から 200 人くらい集まっていた。私たちの部屋は 8 人で、アイルランドから 2 人、ブラジルから 2 人、スペインから 1 人と、ドイツに住む日本人女性と私たち 2 人だった。日本人はもう 30 年あまりこのブリガダには来てないという。珍しいみたいだ。もう 1 人の日本人女性はスペイン語が喋れるので、みんなに「あの子どもたち子供は何しに来ているの？」とよく聞かれたという。うちらが一番に仲良くなったのはオリビア（31）、スペイン人だ。それからアンヘラというおばちゃんやデニシ（26）、その彼氏ルカス（？）（ブラジル）。うちは日本で百姓をしてるんだよとか、辞書で調べながら話す。だんだんとスペイン語を覚えていった。コロンビアやエクアドルの人たちはいつも「あーい！れーい！」と声をかけてくる。アフリカの人たちはいつもすてきな服装。毎日踊ったり、歌ったり、冗談言ったり、笑いにあふれていた。ブラジルのカロリィナ（22）は踊りはすごくうまくて、キューバ人もびっくりしていた。

ある日、チェ・ゲバラの T シャツがくぼられた。今日はこれを着てと言われイヤだった。何か制服みたい……なんで T シャツなんだろ？チェ・ゲバラがイヤとかではなくて、この T シャツを着ることがよくわかんなくてイヤだった。そんな時、『モーターサイクル・ダイアリーズ』にも出てくるチェとともに旅をしたアルベルトさんの話をききにハバナへ行った。話が終わったあとオリビアたちが泣いていた。アルベルトさんの話に感動したという。なぜか私はすこしひいてしまったが、彼女らは特別な想いでここにいるのかもしれない。

サンタ・クララではチェとともに戦ったゲリラに会うことができた。彼らの瞳を見ていると、うちはチェのこと何を知ってただろう？なんなんだろう、このもやもやする感じは……。

ある時、オリビアが社会主義のことをきいてきた。「あい、れいは社会主義？」。よく知らないうちは答えられなかった。でも何か知りたいという感じなのできとうに新自由主義と言った。するとみんなびっくりして「ほんとに？」ときいてくるのであわてて「ちがう、ちがう」と言う。そこでキューバで出会った仲間たちにはいろいろとおしえてもらった。チェのことは、日本では英雄と

かファッションだけど、彼女たちにとってはちがう。何かもっと深く、強いものがある。それはこの T シャツを着る意味「私たちはチェのことを愛している、社会主義者だ」そんな風を感じた。

10 月 8 日、チェ・ゲバラ 40 周年記念の式典には T シャツを着て行った。式典にはチェの妻アレイダさんも来ていた。そんな時、マイクの調子が悪く音が出なくてシーンとなった時、キューバ青年共産主義同盟（UJC）の若者たちが、「なにがなんでもフィデル！」とさけび、拳を振り上げる。私たちブリガダメンバーも声をあげる。すごい式典だった。楽しかった。

キューバはどこの村に行っても子供がたくさんいた。キューバ人マイケルに「子供たくさん、いいね」と言うと、「ハイ」とほほえんだ笑顔で言う。私は「日本の村にはいないよ……」と言うと、信じられないという顔をしていた。あの顔が忘れられない。

キューバへ行き感じたことはたくさんある。でも一番強く感じたのは、有機農業とか、野菜の自給率 100%とか、この国はこれがすごいとか、どうでもいい。大切なことかもしれないけど、それよりも一番は“人”ってこと。キューバでは人が人として生きていた。人ってやさしい、あったかい、人のあったかさがこんなにも心があつたかくなるなんて知らなかった。はじめて人間という動物が好きになった。キューバ人に人生ってなんだろうなんて考える人はいないと思う。だって踊ることが人生なんだから。その習慣で人生を楽しんでいる。昼間の仕事は手をぬいて、夜、踊るためにエネルギーをのこしておく。踊ることが人生なんて、なんて楽しいんだろ！みんなキューバへ行けばいいんだ！

**☆人がキラキラして～人が人として生き、つながって、差別などなく～**  
**大森あい**

キューバの地に足をおいた。はじめて自分の生まれた国以外の地に足をおいた。ふっと見れば笑顔にあふれている人々、ヒッチハイクしているひと、そしてこちらをみてウインク！人が生き生きしている。うれしい。心が躍る。

私はキューバ国際ブリガダに参加した。チェ・ゲバラが死んで40年の今、キューバに35カ国の人々が集まった。すごい人だった。その時ブラジルのカロリナと出会った。スペイン語も英語もできない私に「気にしないで」と声をかけてくれた。ふっと気づけばエルサルバドルのマルセロとも一緒に笑っていた。スペインのオリビアとも。みんな日本語喋れない、私もスペイン語できない。でもそんなこと関係なかった。心は通じているみたいに感じられた。すごく素敵だった。夜はいつもダンス!!もうすごかった。みんな音を聞いて、そして踊る。キューバ人のマイケルはすごくうまかった。彼は少し日本語ができる。でも結構忘れたみたい。なのに喋ってる。そのうちにどんどん思い出して、どんどん覚えていく。キューバの人にとっては頭もいいみたい。キューバの医療もすごいんだ!本当にそう思った。キューバは病気になってから考えるんじゃなく、一人一人を見ている。しかも三分の一はボランティアで行っている。だからキューバは一人でたくさんの人を見ている。でも給料は安い。アメリカはキューバ人にお金を渡して国に帰れとジャマをしていると聞いた。でもキューバ人はそんな中で闘ってる人の方がずっと多い。本当に素敵な人々だ!ある日みんなでハバナに行った。その時、海沿いの道でお酒を一口呑んで、みんなとびしょ濡れになりながらもすごくキラキラして楽しそうだった。私たちも一緒に遊んだ。あたたかい、みんなあたたかかった。歩いていても瞳があえば、めちゃくちゃ最高の笑顔でウインクしてくれる。キューバの人々は瞳で語りあうんだ。日本では目と目があわず、メールで語り合う人々。キューバを見て日本という国を見ると、日本はみんな一人で生きている。一人一人の壁がたくさんある。キューバではみんな繋がってた。どこの国とか関係なく、人と人が繋がりと、素敵だった。いつも音に溢れていた。そして愛に溢れている。キューバのイスラの方で出会ったキューバ人のエドワルドさんは日本で働いたことがあるけれど、「まともな仕事はくれない。」彼は「こんな資本主義国はイヤだ」と言っていたみたいだった。彼はキューバで漁師をしながら自給自足の暮らしをしている。彼が釣った魚は豚も犬も鳥も人も食べている。猫も一匹くわえて歩いている。豚はマンゴーやパルムの木の实を食べてるので本当においしい!!

彼のおくさん、日本人のよし子さんと動物たちと村の人たちみんなと暮らしている。すごくてきだった。

キューバは物がなくても愛に溢れている。日本には物ばかり溢れ、愛はどこかに行ってしまった。もっと物がいいんだ。物は人を呑みこみ、森を壊し、愛までなくしてしまう。キューバで出会った中に韓国の人がたくさんいた。びっくりするほど平和運動がすごかった。ブラジルのデニシが韓国のTシャツを着ていた。そのTシャツのマークは再処理工場反対のマークだ!そこには「子供たちには関係ない、止めてくれ」。彼らの気持ちはすごくわかる。日本にも再処理工場があるのを知っていますか?青森六ヶ所村には大きいがある。日本人で知っている人は少ない。なのに彼らは知っていた。私は韓国のことなど何も知らなかった。なのに彼らは日本のことをよく知っていた。日本人は自分の国のことさえ知らない。彼は手に古傷があった。消えない傷…。デモの時ポリスに切られたと彼は言った。闘いは終わってない。キューバの国は本当にすばらしい。でもその前に韓国を知ってほしい。日本の人は自分のことしか興味がない人間が多い。そんな人が多い日本国は他の国に興味がない。でもとなりの国韓国だけは知っていてほしい。キューバで出会ったみんなに出会い、私は教えてもらった。人が人として生きて、繋がって、差別などなくみんな一緒に生きて、歩んで行く。

キューバは停電になってもホワッと光るホテルの灯りがある。私はキューバのすべては知らない。住んで、そこで生きていかないとわからないことはたくさんある。日本に帰ってきた。ニュースを見れば総理が替わっていた。でも何も変わっていない。キューバを見て体で感じてみて。頭じゃないよ。心で体で、爪先まで感じるんだ。自然は生きている。そして美しい。人も美しい。初めて人がこんなにもキラキラしていると知った。キューバありがとう。

(「あい、れいのキューバ訪問記」は「あーす農場だより」より転載させていただきました。)

## 周恩来への手紙

………記憶の謎と謎の記憶

千田 智之

この「サワサワ」に何がしかの拙文を載せて頂いて、これまで三回で唯一の反応が或るジャーナリストからの取材であった。二度ほど会って直接のインタビューを受けた。35年から40年も《昔のコト》が話題であったが、別段私が主人公ではなかった。実に多くの人たちに取材をして来たと言う。彼女は自らの著述プランとそのスケジュールに則って、言わば傍証を幾つか得たかったのだと思う。版元（出版社）の意図は分からないが、それなりの社会的反響が期待されるような人物や事件かを取り上げてこそ出版という事業は成立する。

取りあえずテーマが何であれ、ノンフィクション・ライターとしてそれなりの事件と人物についての単行本を上梓するとなれば、全てを書き表すことは出来なくても、詳細を掴んでおきたいと思うのは当然だろう。「神は細部にこそ宿る」のだから。しかし、幾つか「回答するのが困難な問いかけ」を受けた。

問いかけられたのは〈今の私〉であって、〈過去の私〉ではない。考えて見れば、30数年前の《私》が答えてくれるのであれば、私も彼に問いかけたいことは多々ありそうだ。しかし、そんなことは詮無いことで、私はそんな努力をしたことがない。もち論、何の反省もしないで生きて来たということではない。

ここまで生きて来たからには、数多の事実＝出来事——その殆どが多分何の脈絡もないのだろう——に関わり、また、それなりの「事件」として多くの人たちに記憶されていることの一部に出会っていたには違いない。しかし、たとえ同一の人格を維持して来た積もりであっても、全てのことが記憶されていないのは当然のことである。とは言え、漫然と生を費消してきたわけではないから、何がしかのことを記憶しているはずである。経験とはそう言うことだろう。

だから、応答が困難ということはない。どのような「問いかけ」であろうとも、〈今の私〉に回答出来ないことはない。知らなかったか、忘れたことがあったとしても、それもまた現在の事実ではあるからだ。問題は、憶えているはずなのに思い出せないという、その困難性が何にあるのか、何に因るのかだろう。

私には既にそのようなインタビューを受けるという経験があった。10年程前には、同志社大学に留学していたアメリカ人が現代政治論を専攻していて、1970年前後の学生運動について知りたいということから、数時間のインタビューを受けた。3年前には、立命館大学の学生が、卒論のテーマとして、オーラル・ヒストリーを取り上げ、京都の学生運動の聞き語りを書きたいと言って申し込まれたので協力したこともあった。いずれも女学生だったので喜んで協力したが、とは言うものの私は別段、70年代の学生運動の「語り部」ではあるまい。語り部の存在理由は先ず、伝承することができて、なお、そうすべきものの「目撃者」であることだ。

留学生や学生からの要請に応じても伝承は難しかった。ポイントはそれぞれに違うとしても彼女たちには背景を理解するアスペクトや知識が不足していた。もう30年以上も《昔のコト》にアプローチするには「歴史的知識」が必要になるのだろう。

だが、ノンフィクション・ライターが求めたものは「情報」である。社会哲学者のアルフレッド・シュッツによれば、何らかの情報の良質な人的源泉とは、4つのパターンしかない。それは、目撃者か、部内者、分析者、解説者なのだが、幾つかは兼ねられてもすべてのパーソナリティーを同時にこなすことはあり得ないことだろう。

今まさに何かの「事件」を目撃したとしても、それなりの分析や解説がその場で成立することは殆どあり得ない。まさに「火中の栗は拾えない」のだ。だが、目撃した事実の記憶が薄れても、分析はそれに必要な能力や知識があれば可能だし、聞き手の理解のレベルを掌握すれば解説も不可能ではない。火が鎮まれば栗を拾うことができる。しかし、彼女が求めたものは、強いて言えば「目

撃」情報であり、「部内」情報である。〈今の私〉の分析や解説などは大きなお世話なのだ。鎮火してからしか拾われない栗がどうなるのか、「火中の栗」自身にはその運命は分からないだろう。

語り部を自認してもいない私にこのようなインタビューが要請されるのは、元全共闘或いは元パルチザンなどと誰彼かに認知されているからだろう。しかし、そのような属性や経歴と言うものは実は何も正確には表していない。はっきり言えば、それは関係性の別称であり、それ自体は表象でしかない。かつて「運動体」として在ったとしても、決して「運動＝組織体」ではなかったのだ。何故なら、それらには何の盟約もなく、構成員登録という行為もなかった。何かを誓約して全共闘であったわけではなく、もち論のことに登録リストもなかった。つまり、それはそれ自体として「歴史」を有することがない。「運動＝組織体」として在るべきものは、解体されるか消滅するまできっちと〈歴史＝記憶〉を有していなければならない。

だが、問題は「回答することが困難な問いかけ」である。昭和の日中戦争に駆り出された一兵士に「あなたは何故戦争に行ったのですか」と尋ねることに意味は無いだろう。当然ながらそれは徴兵制という国家的制度の強制に因るものだからだ。回答が容易で全く正しく行われることには誰も「問いかけ」はしない。だが、人の自由意思——何からの決意や選択がすべて自由に行われるわけではないとしても——や、人と人との出会いの過程や結果は、明瞭な「問いかけ」の対象とはなっても、「回答」することは困難なのである。それも最早30数年も《昔のコト》だとすれば尚更だろう。

〈過去の私〉にとっては、自然な流れの中で次々に生起する出来事の連続性において結果したことの幾つかが、〈今の私〉にとっては強いて言えば「謎」であり、「奇跡」になっている。もう忘れたい、或いは、思い出すが面倒だから、謎の、奇跡の、と言って誤魔化そうとしているわけではない。

一般的には、個別的な出来事が実現する背景やコンテキストが見えにくいから、何かの偶然は「奇跡」として現れもする——大袈裟な物言いであるが、ここで言う「奇跡」とは誇張された偶然であり、その印象の大きさはそれぞれの

主観や状況によって異なる——が、その当時の当事者として背景やコンテキストと一体化しているとすれば「偶然」は全く意識されず、個別的な出来事の積み重ねが予期せぬ結果＝事実として現れ出でた時をもって「奇跡」が生じるのではないか。〈今の私〉にとって〈過去の私〉は謎であり、〈過去の私〉にとって〈今の私〉はまさしく奇跡であろう。

だが、ある程度までは事柄の背景が分かり、個別的な出来事の因果関係がそれなりに整理できたとしても「謎」は残るに違いない。だから、回答できないからこそ「謎」なのだというような陳腐な同義反復には陥ってはならない。謎は忘却や含羞ではない。また、言うまでもないが、秘密でもない。秘するということは目的意識的なことだから、知らない人には謎に見えてもつまりは開示されていないだけのことだ。

誰が思い出すのか、何が思い出されるべきなのかの《決定》を誰がするのか。これは、誰かと誰かの意味をめぐる《闘争》とも言えるだろう。要するに、困難なのは意味の連関の解明であって、特に目的を有する解明という作業＝行為は当然にも意味の連関を限定し、その目的そのものが元々の連関を見失わしめるのではないか。解明はそれ自体がフィルターなのだ。また、何らかの出来事の連鎖の結果だけやその影響から推論するから、何ほどのことも無い事柄が「謎」になるということもあるだろう。つまり、現実には小説では決してないのだが、事実は小説より奇なりということになる。

人も社会も簡単に多くのことを忘れる。個々人にとっては、忘却は心理的な自己防衛に役立つことが多い。「辛いことは早く忘れよう」と意識されたことは忘れにくいものだが、自己防衛の無意識な心理作用が働くことを意識的に抑制するのもまた難しい。しかし、「社会」が余りにも簡単に忘れるのは、何かの力が働いているのではないか。ヴァルター・ベンヤミンは何処かで、忘却による破壊から意識を守るプログラムを開発する必要があると指摘したことがある。彼の言う「意識」とは社会的意識に他ならず、「社会としての言説」の問題なのだろう。人々は簡単に戦争の悲惨を忘れ、戦争責任を問い忘れてしまった。それは誰かに都合の良い事態なのだ。

## 訪朝記

—その一コマの記録

牧野一樹

共有すべき社会的経験が適当に忘却の彼方に消えていくことはないのであって、幾つもの歴史の経験が教えるところによれば、それは支配に都合の良い制度や支配的なイデオロギーによって歴史が塗り替えられるからこそ生じる。このような強圧に個人が意識的に立ち向かうのは難しい。しかし、そうした意識がまた偶々働く所で「謎」が生まれるとも言えそうだ。私自身に謎はあっても、自分に秘匿することはないのだから。

翻って、「秘密」には満ちていても「謎」がない、或いは、あってはならないのは、「組織としての言説」だろう。特に、運動＝組織体のリーダー達の言説は、個人としての「謎」をどのように昇華させ得たのかを感じさせない。例えば、多分編集者が創作したアイロニカルなタイトルの、ある座談会（『情況』2008年3・4月号掲載「みなさん、お元気ですか？昔の名前で出ています。」）は、その内容としては何らのアイロニーもない。何故なら、「社会としての言説」のイデオロギー性とは、歴史的な様々な矛盾を孕んだ関係を如何にも自然なものとして見せ、現在の現実はずっと永続するように思わせる処にあるように、リーダー達は、最早失われた統一が今なお時間の中に存し、首尾一貫性を語り得ることによって、「元ブント」という、意味のある属性或いは経歴の正確な実体を担保していると思われてならない。

凋んでしまい、消えてしまった「組織なき運動体」はノスタルジアの対象ともなり得ない。それが生み出されたのも「謎」であり、それ故に凋み、消えたのである。〈現在の私〉にとって端切れのような「謎」だけが、〈過去の私〉との間に残っているのだ。私が関わった「組織なき運動体」は、本当に「周恩来への手紙」を書いたのだろうか。何の為に中国の首相に手紙を書こうと話し合われたのだったか。何故その相手は毛沢東ではなく、周恩来だったのだろう。そして、果たしてその手紙は海と時間を越えて届けられたのだろうか。私には最早何の記憶もない。そのこと自体が「謎」である。

(2008/6/10・記)

2年ぶりに北朝鮮（以下；共和国）に行つて来ました。去年は洪水と南北首脳会談というサプライズの中で万止むを得ず訪朝を中止しましたが、この一年間の間隔は私にとって驚きというか、共和国の大きな発展を身をもって感じるようになりました。

5月、水田に水が張り詰められ田植えも近く、緑も日一日と濃くなるさわやかな季節ということもあったのでしょうか、若いも若きもすぐに踊り出すのではないかと思われるくらい軽やかに、目が輝いていました。万景台での家族連れも、日本で見る風景と何も変わらず、故主席の生誕地にうやうやしく詣でるといふ気配は全く感じられず、1本1ウォン（90銭）という売店のシャーベットの食べながら遠くピョンヤンの市街地のあれこれを探しあてているという風で、「社会主義リアリズム」という表現がこの国でも死語になったのかと思わせる光景に色々とお会いしました。例えばトロリーバス中で若いカップルが抱き合う姿は目を疑う程にショックでしたが、マイクロバスから手を振ると子供たちがそれに応え、手を振ってくれるという初めての経験もしました。それと人々の服装も大きく変化し、色鮮やかな多様性を感じました。記念すべき日ということでもないのに、チマチョゴリには文様が美しく写し出され、大きな刺繍の施されたものを着て堂々と街を歩いている夫人も見かけました。共和国は明らかに二年前とは異なった、人々は自身と確信をもって前に進み始めたと思えました。

さて、今回の訪朝の目的の一つは、若松孝二監督の『実録・連合赤軍～あさま山荘への道程』のDVDを小西氏をはじめ、よど号HJの人々とその家族に鑑賞してもらうことでした。

小西氏たちは我々がホテルに着き、食事を終えた頃丁度、ロビーに到着し、若松監督と長年の知己であるかのように「あの頃」の思い出話を始めました。ホテルにDVD機材が備えていないということで、彼らの住居で観てもらい、後日、感想を聞くこととし、合評会の約束をして当日は別れました。日本での評判を風聞で聞いていたのか、若松監督になぜこの映画を撮ったのか、台本ではどのように構成していったのか、パレスチナを訪問し、岡本公三氏の感想はどうだったのか、日本での評判など山のような質問の中3時間はあっという間に過ぎ、若松監督にとっては、緊張した初対面のようなようでした。

そして翌々日。社会主義化の進む工場や農村現場での討議（それは模範農場とは異なる試験場で、率直に現場の人たちが言葉を一つ一つ選びながら応えてくれた）、経済研究所の人たちとの現状分析（若松監督はその間、朝鮮でのパルチザン闘争の実際を学ぶために革命博物館、そして現在の共和国を学ぶために地下鉄の見学に出かけ、本当に引率の方々には突然の申し出を快く受け止めていただいた）の討議の時間をいただきました。もう少し時間がほしかったが、小西氏たちを迎えなければいけないので、途中で時間を切りました。在日で京都大学出の所長は、30年前に本国に戻り、研究活動を継続しておられるが、この間、神経痛が体を侵し、だいぶ痩せておられました。ホテルの入り口まで送り、部下の研究員が体を支え、車に乗り込んで行かれました。痛む体を引きずりながら、我々のためにわざわざ出迎えていただいたのには、頭が下がりました。

小西氏たちとの合評会は夜9時を回ってからのことでした。「日曜日に皆で観ました」と切り出し、それぞれの感想を述べられ、「自分たちにもあの責任の一端がある。ここまで正確に、かつ好意を持って、全体を描いていただいたことには感謝します。」との発言があった。「それでも3時間という長い間観てその日は重い一日でした」という若松氏の感想は私の感想とも一致していました。3月20日に京大西部講堂に500

人（若い人が半分くらい？）、その中30人ほど昔の仲間が白髪なびかせて、3時間見入ったが、最後の方は誰も顔を上げられなくなって、彼らの感想もほぼ小西氏たちの感想と同じでした。「配役も良かったですね。とくに塩見氏はでき過ぎ、本人はすごく喜んでいるでしょう。」と大笑いをしました。そして田宮氏についても彼の特徴とスタイルをよくつかんで描かれていることに感謝の言葉を伝えられました。

あとは「帰国問題」。米朝交渉の進展の中で、米国の共和国へのテロ支援国家指定の解除が「タイムテーブル」に上げられ、現実味を帯びてくる中で、「よど号」がキーワードから除外された（昨年、安倍首相が訪朝した折、ブッシュ大統領から拉致問題も含めて通告を受けている）ため、彼らの帰国問題はフリーハンド状況に置かれました。つまり、国際政治の攻防に左右されずに、自身で判断し、「帰国問題の最終章」を描くことが出来る状況が訪れています。田宮、岡本、吉田、田中氏など、亡くなった同志たちの無念と志を引き継ぎ、北東アジアの平和の実現に向けた歩みをどう構築していくのか、「帰国問題」の最終章とはその道筋をつけていく歴史的作業に他なりません。もちろんこの作業は、日朝人民私達の共同作業であり、朝鮮と日本の間に滞留する歴史的・今日的桎梏をとりのぞくことを主題にしつつ、人々が共に生き、共に食らう、笑いと悲しみを共有できる社会を実現すること、そのものです。朝鮮の懐深く生きてきた彼らが、この最終章をどう描くのか、思いあぐねながら帰国の途につきました。もちろん共同の戦線をどう築いていくのか、現実の厳しさを踏まえつつも…。



## 短歌で遊ぼう

### さわ女と「寄っといで短歌」

みんなやる気満々楽しげなのがうれしいことです。やってみようか、やってみたら楽しいけるな、皆ひそかにだんだん自信作を育んでおられます。新緑の木陰で品評会をやったら楽しいでしょうね。いつかみんなで、そんな時をもってください。私や、影法師さんや、M・Mさん、Y・Mさんは、参加できないけれどそんな交流を夢想しつつ、感想を述べさせていただきます。

#### 岐阜刑 影法師

「さわさわ」の会員の皆様、少し早いかもしれませんが、暑中お見舞い申し上げます。また拘禁生活を余儀なくされている皆様、その後お変わりなくお元気でしょうか。本来であれば皆様に直接励ましの手紙を差し上げたいのですが、何分にも無期囚の身の上、それが敵わず残念の極みに思っております。しかし、皆さんの側には貴方の帰りを待っている家族や仲間がいることを忘れず、夏の暑さなんかには負けず希望という二字を胸に頑張ってください。

「さわさわ」では私のような者の作品を毎回取り上げて頂き感謝しております。特に今回は、さわ女さんのメッセージが添えてありましたので、とても感激しております。俳句はともかくとして、短歌は全くの素人ですが、さわ女さんの詩が愁いを感じさせるものばかりなので、つい私の元気を分けてやりたくなり、励ます意味で今回も作ってみました。

- (1) 謂われなき汚名を晴らす君がため我等が願い天にも届け
- (2) 中東の平和を願う女神には百計尽きても万策尽きず
- (3) 星空と山の匂いと無視の声届けてやりたや小菅の人に
- (4) 核のない平和の国をつくるため神も見守るみんなの願い
- (5) 広島閃光に消えし幾万の平和ドームは墓標なり～ (4) (5) 題詠～

#### 俳句

- (1) あじさいは猫が恋するネットカフェ

(2) 浴衣着て金魚買ってと急ぐ娘かな  
川柳

虎刈りで巨人ファンが怒りだし

自らも苦境の中にあいながら力強いはげましの短歌ありがとうございます。そう  
です。「百計尽きても万策尽きず」たとえ天が落ちてきてもさわさわの友のある限り！とそんな思いにさせてくれます。アラブ・アフリカは闘う女神の街です。シバの女王も、クオバトウも、バミニアの女王もみな智の先達です。小さき私を察天でいきます。(5)の一首はいいですね。3号の米澤さんの「核と人類は共存できない」に呼応して直視した現実を浮き彫りにして詠まれていますね。俳句、川柳もなかなかですね。難しいと思っていた川柳は、影法師さんからさわさわ塾は学べるかも知れません。乞うご期待です。

#### 岐阜刑 M・M

4月23日、さわさわ3号が手元に届き、早速、「寄っといで短歌」を拝読させていただきました。さわ女の感想もあって、とても楽しく、そして嬉しく思いました。”捏ねるほど色の濃くなり鶯餅”の句も気に入っていただき、下手な俳句ですが、また投稿したい気持ちになりました。では俳句五句投稿します。

- (1) シグナルや止まる日傘の揺れており
- (2) 仕切るとき睨みきかして金魚玉
- (3) 海鳴りのどんとぶつかる晩夏かな
- (4) 桜散るきみとぼくとの別れ道
- (5) 公園にまた一來て小春かな

3号はちょっと誤植があつて「捏ねるほど～」の句が残念にも他の句の頭とダブッ  
たいしました。私のコメントも尻切れトンボでした。きっと4号は改善されるはず  
です。M・Mさんのは視覚が広がる鮮やかな情景が句になっていて、逆に照り返されて人  
格を奏すようです。広々としてきっと、(今は?)寛容な心の方でしょうね。今回のみ、  
(3)が広く大きく一番好きです。(1)もいい句ですね。「交差点」と「シグナル」を  
とにかえてみましたが、やっぱり「シグナル」の方が、情景がみえるようです。

#### 千葉刑 Y・M



「さわさわ」 いい文字であり、響きです。私も、心だけでも一緒にとっております。

星のない獄舎に籠められあの方にせめて心に花と光を  
きっと同じ思いですね。星のない獄舎。今の私の独房のルーバーの隙間からは、  
空を見えませんが、転房で、月見のできる房にいけるとうれしいのですが、今は見  
えませんが。心に花と光を。そして、さわさわの精神。「よいことは分かち合って、倍々  
に。悪いことはわかちあって新々に！みんな一緒に！」そんな姿勢の人々とY・M・  
さんも共に！

哲蕉

「さわさわ」誌上に載せるなんて、とんでもない話ですが、即興で初に書いてみま  
した。三十一文字には収まってはいらずで、自由律短歌にしかありません。この程度か  
と笑ってください。

- (1) 孫を見て遺伝子とは不思議なもの三十年前吾娘の姿じゃないか。
- (2) 生まれたばかりの吾子を胸に抱き 100cc のミルクを必死に飲んで  
いた姿を孫に見る
- (3) 三十八年経ても何故にかくも穏やかな気持ちで対話のできた自分  
が嬉しい
- (4) 年齢を重ねても対話の向こう三十八年前の若き日の面影はつきり  
と見ゆ
- (5) 若き日の情熱的な語りはなきしとて六十年を生きてきた静かな一  
言いつまでも心にしみ残る

5月に面会し、38年ぶりに再会した感傷の場面をうたっています。昨日合ったよ  
うに、ずっと相貌まで昔のままに若いまま。短い時を語り合いました。旧友とは不思議  
です。口調も何もかも昔のままに感じられました。ありがとう！(1)は、爺じいとなった  
リアルタイムの響きがよくまとまって、いい歌になっていますよ。(2)を、「わが胸で百cc  
のミルク飲む吾子と等しき必死の現見ゆ」、(3)を、「おだやかに三十八年経た再  
会対話のできた自分が嬉しい」、(4)を「対話しつつ三十八年前の君若き日の面影  
はつきりと見ゆ」、(5)を「若き日の情熱的な対話こえて静かな一言心にしみる」いも

のになりそうですね。哲蕉さんのようにまず、思いをわいてみる(第一段階)、次に音  
読みで、リズムを考えてみる(第二段階)、そこで言いたい事を選び、詰め込み過ぎ  
の言葉へらしていく(第三段階)。歌の想いを吟味していくこと、重なっている言葉  
が多々あります。そんな風にしたら、もう歌人並みにいけるのでは!? 健闘を祈りま  
す。

平良

知人友人の死によって、生の大切さを教えられているこのごろです。『時は金なり』  
と言いますが、そうではありません。『時』はお金で買うことができません。なくした  
ものを取り戻すことも出来ません。その意味ではむしろ『時は命』なのでしょう。命同  
様「今」を大切に生ききろうと思います。

便箋の青いゴム印推し量る君の不自由と君の不撓と

そうした『時』を、不自由な条件の中で生きている私のことを、歌ってくれた一首  
です。私からの手紙は、検閲の青い◎こんな印のゴム印が押されています。その検  
閲印を見ながら"命"と"自由"について慮ってくださったものです。「便箋の青  
い検印」とした方がわかり易いかと思いました。どうでしょう。みんなに支えられて、  
不自由を不撓に変える力を篤い、励まされているのです。独房で世界と断絶して  
いたら、この力は生まれません。世界とみんなと繋がっているという実感が、私に力  
を育ててくれています。あらためて、「さわさわ」のみんなに感謝

大阪 味岡理一

アンネの日記に涙してパレスチナで銃を取る

リッダ闘争の戦士たちを思い出しました。彼らはまさにその瀕りの人生でした。奥  
平さんはアンネの日記にこころ打たれたヒューマニストでした。「ユダヤ人問題の解  
決」の名で占領され、虐げられ、追放されたパレスチナの民と共に闘っていきました。  
リッダ闘争の日本人ばかりではありません。当時、私の回りにいたボランティアの私  
と同世代のオランダ人、仏人、ドイツ人、イタリア人などはみな「アンネの日記」に心  
を寄せられてパレスチナに連帯していたのを思い出しています。

兵庫 ごめんねジロー

元気でお過ごしのことと思います。変わりがないのが何より。季節はめぐり、生命が

芽生え、育ち、実をつけ、つい果て、また芽生え…。そんなわけで、お豆さんがたくさんできたので、お裾分け。食べてやってください。(森本註：豌豆まめをたくさんいただき冷凍してありますので、ご希望の方にはお裾わけいたします。)

過日、一人で「実録・連合赤軍 あさま山荘への<sup>みち</sup>道程」を京都シネマで観てきました。連れもたず映画「連赤」観たあとで津軽三味線しばし聴きたり

芋も豌豆もおいしいなあ…どうやらましがついています。映画をわさわさわ一人で、裏巻をもって観られたのですね。そして心躍まらず茫然としてかきたえられる想いを、縛めたい燃やしたいアンビバシ的な感情で、津軽三味線を聴いたのでしょうか。反省を込めて、連合赤軍の闘いの時代を思い、建前で無理せず、闘いを楽しみとしていた初心に帰りたいから今の一步を！と思います

#### かおり女

- (1) 寝坊して戸をひきあければ鳥の声おもてはまるごと春になりけり
- (2) さわさわの表紙にわらう顔と顔大和の冬の寒さゆるむ日
- (3) たくさんの思いがあそぶ吉田山友がつないだ縁を知る春
- (4) 吉田山夢かうつつかたのしげに亡霊たちがどんちゃん騒ぎ
- (5) 雨ふって花のかおりはなお強く壁突き抜けて房にも届け。

かおり女さんは、ずんずんと歌唄れして、心を歌っていますね。(1)は「まるごと春になる」表現がよいですね。(2)は「わらう」と「寒さゆるむ」とが対ですよいですね。うーん、二作目、三作目と心をかきたてますね、吉田山も。歌う心が明るい若向性なのが良いものになっているのでしょう。

(5)房にも届きましたよ！ラベンダーの押し花もありがとう。更に詠んでください！

#### 森本忠紀

##### 俳句

- (1) 保育所の紙こいのぼり三頭身
- (2) 六十路主夫物干しへ駆ける春の雨

##### さわ女の返歌

気がつけば春雨けぶる音もなく六十路の主夫我れ物干しへかける

- (3) 登校のランドセル待つ道の薔薇

##### かおり女の返歌

父と娘が今朝も連れ立つ通学路ピンクのぼらがゆれています

- (4) リハビリに皺波打たせ母笑う
- (5) 枇杷食べる娘ら口ずさむ枇杷のうた

##### 短歌

(1) ~ (5) 題詠

- (1) 味わいは米澤鐵の年輪かヒロシマ語るその語り口
- (2) 被爆せし幼な児死地より生還す「奇跡の人」の物語あり
- (3) 爆心地その真ん中に被爆せし幼な児生きていま語り部に
- (4) ヒロシマを語りつきせぬこの人を大和高田に呼ぶ日夢見る
- (5) 登校の娘の手握ればあたたかく吾が胸のうち願うは平和
- (6) 老いし親の食卓に盛る手料理の味の決め手はわがジョークなり

句の(1)三頭身のこいのぼりは秀逸です。新聞の俳壇でもえられそうな味わいです。さわ女もかおり女さんも文通の中で歌や句を思わず交流して楽しんでしまいい返歌が載ってますね。編集長の特権です。短歌の(2)(3)は、たけなす語り続けろ米澤さんの姿への感動をピッタリとあらわしていて、これも好きな歌です。森本さんの歌は、生活があって、日常の切り取り方が、なかなかいいものです。笑えるものもあって、生活の大変さ、専任さが豊かな楽しさと一つなのが、よくわかります。(5)に私の思いも重ねたいです。子供の手のぬくもりを、さわさわとつないで。

##### 愚蓮

- (1) 一筋に川面を走る蛍火にほのかに薫る池の蓮の葉
- (2) 野も山も見渡す限り夏走り彼の日を知らぬことぞ悲しき
- (3) 大君は悲しからずや週刊誌記事に埋もれて今を越らん

(1)は美しい情景を浮かべます。万葉調の梁塵な歌は、(2)、(3)と謎のように、愚蓮さんの心の奥をのぞきたくなります。難しいなあと思いつつ、味わっていますよ。

##### 原啓介

3・30と5・30に寄せて

- (1) 三月と五月の末はうら悲し春来る前に別れし友よ
- (2) 絵解きせず弁解もせずただ我が身異国の郷に果てさせるなり

- (3) 前史とて後史すらないパルチザン語り継ぐほど己が涙に
- (4) 百万遍道を隔てて我が息子眩しいほどに若さありけり
- (5) 不条理な欲求のまま青春を埋(うず)めて悲し時計台前
- (6) シネマにて客が入ると聞く映画胸が騒ぐも足が凍りて
- (7) 今もなお耳に残りし美枝子さん大丈夫なのと繰り返す声
- (8) 年頃が似た尾崎くん足のケガ治っていないでも殺すのか
- (9) 実録を観たと報告我が息子無言で入れるお茶の渋さよ
- (10) パーシムとサラハに続くユーセフの笑顔ばかりが心に沁みて
- (11) 花炎忌と名付けし人も今はなく荒神橋に賀茂の川風

闘った人への愛と情に溢れている歌が多いですね(1)(2)(3)(10)には同志よ!という熱い心があふれていて、当時の京都、それから、ベイリート、パールベックのベカー草原をまた、思い出させます。(3)、そうだった…前史でとぎれていたな…今おだやかに友だちぐるみ、家族ぐるみ、地域ぐるみの、あしもとのところから、さわさわと、復讐を今なら舐めるのでは?と思いつつ、11ヶ月闘争もまた連赤もあの72年の季節でした。当時の闘った人々の心の霧のような無念さで何故という連赤の歌も心に響いて辛いです。本当は仲間が仲間をいためつけるところは映像にしてほしくないところでした。観れないのに本当はホッとしています。アモ(9)強烈な無言の響きは、父だけでなく、離れた独居の私をも射ています。「わかる必要ない。わからなくていいよ。」と伝えたい。私たちだって今も何故!と叫びたいし当時の当事者もそうでしょう。アモ正して次へ、息子、娘たちへバトンタッチしたいと、さわさわと一緒にものがきつ前に進みたいと思います。それにしても暗い息子への愛は、暗い自身のせいあゆみですね。原さんは、もう短歌詠みが習慣になっているようです。田川さん。「字余りの田川節」が今回の、(巻頭の、「読者のみなさんへ」の文章の中の)俳句では百人のようです。俳句が合うのかしらん。いい句をありがとう。旗が希望の絆になりますように。

#### さわ女の短歌

##### 題詠

- (1) 「生かされた私」の義務とヒロシマを語りつづける被爆の君は

- (3) 原爆忌「ああ許すまじ原爆を」と歌いし友は戦場に死す
- (4) 鬼アザミ夏草繁る草原でヒロシマナガサキ九条語りぬ
- (5) つゆくさの青に指染めし夏の日に父よりききしヒロシマのこと  
さわ女のある日の手紙より

「今日は4・28です。赤軍派の始まりとなるこの69年4・28は私にとっても印象深いです。後に『ナップサックを買った』と言って逮捕理由にされたので特に。でもあの時代は明るかったです。4・28の日、銀座—新橋のデモでした。「銀パリ」というシャンソン喫茶で、歌ってた友人が、『機動隊がこっちに来る!』とかレポしてくれたり、勤めてたバーのママが道に出て行って、『赤ヘルの人!かくまってあげます!』と、ヘルメットを預かってあげて、私のことを話して、『明大に取りに行きなさい』(ヘルメットを持っていると、蹴散らされて、その後、逮捕されたり市街戦だったので)バーに行ったらヘルメットが二つか三つか忘れたけどママは嬉しそうにしました。そんな時代、闘いは希望があり、また、勝ち取れる!という日本でした。闘いながら、日本をとっても好きだったけど、今は、好きになりたいけど、違和感の日本という感じです。」

上の手紙をもとに、森本が短歌を一首、試みてみました

4・28 デモった頃の日本は希望があった大好きだった

終わりに…皆さんの歌を読みおえて、添削どころかと、心をかわせつつ味わいました。みんなの歌と向き合うと、己は?と問われ、とつても正直になれます。被爆やヒロシマの歌も「連赤」の歌も、時代に生きてきたぞ!というトートの濃い思いが、力になって訴えています。これを読みみんなが更にまた何か前向きにとつてくれることでしょう。感謝しつつ筆を擱きます。

次号、5号の題詠は「肉親」です。  
みなさんの力作をお待ちしています。



## 俳句とわが人生 (その1)

おさしろまんり

2号に寄稿した時、「後付け」が省かれたのは残念だった。例えば、「霞立ち生駒は夢に 消えんとす」と言う句は、西宮市甲山森林公園展望台から、'03年3月15日朝、生まれ故郷の奈良盆地の方向を見やっていた時、泉州沖から張り出し始めた春霞が生駒連山を見る見る覆い眼前の全景が乳白色のスクリーンと化した実景を詠んだ。丁度、奈良二月堂“お水取り”明けの朝だった。

事業に失敗して前年暮れ「競売落札」にて西神戸の自宅を追い立てられた私は、高3の息子を連れ、妻の姉宅マンションに寄宿の身だった。毎朝神戸方面に出かける二人をJR芦屋駅まで送った後、独り森林公園を散策し、煙草をくゆらせながら故郷の方向をぼんやり眺めたりしていたのである。

私は、小、中、高、大と八木健彦氏の一年後輩にあたり、運動部では「軟式テニス部」で一緒だった。その中学校は東大寺南大門の真西にあり、その関係で3月14日の深夜、希望者は「韃靼<sup>たつげん</sup>の行」が繰り広げられる二月堂本堂への臨席が認められていたのだ。眠気に耐えた夜が明けると、決まったようにポカポカと春の日差しが朝が待っていたのを今でも鮮明に想い出す。

中学校には珍しく「俳句会」という同好会があり、高浜虚子らのホトトギス派に属していたらしいS教頭のお寺の広間で催される句会には、必ず最中などの和菓子が用意されているので、内心はそれを目的に皆勤だった

東風<sup>こち</sup>切<sup>あき</sup>って 飛<sup>あき</sup>ぶ愛<sup>きゆう</sup>鳩<sup>う</sup>に 笛<sup>ふえ</sup>を吹<sup>ふ</sup>く

「中学生毎日」か「朝日」かは忘れたけれど飯田蛇笏<sup>いひだへびすく</sup>だったかの選者に採用されもした。春日大社や興福寺で「狂言」を演じている級友の父上が私の才能を買ってくれ、「きんでん俳句会」に大人にまじって、しかも無料で出席できるようにしてくれた。

“考査紙にほおずきのせて女学生”だったか“赤い羽根ふくらみ初めし胸にさし”あるいは“ことごとく反るポプラに悔い多し”のいずれかが、新年句会で並み居る大人を尻目に首席に選ばれた。賞品代わりに師匠の句がもらえるというので、“凧揚ぐる一念に日の落ちんとす”という岡本圭岳師の短

冊を意気揚々と持ち帰ったのだが、母は「何か単純な句ねえ…」と酷評した。それ以来、母の癌が全身に転移ししみながら逝去するまでの5~6年、私はほとんど口を利かなかった。

今思えば、インドネシア、ジャワ島スマランで行方不明になった、外科医の夫が「いつか生きて還ってくるのでは…」と待ち続けていた母にむごい対応だったかとも反省するが50年も前の、“三が日”の茜空に時を忘れて凧を無心に揚げ続ける人または子供の囃<sup>は</sup>秀句を貶<sup>おとし</sup>された怒り、それも致し方ないのではと思ったりもする。

## 短歌を語る

小嵐九八郎(作歌・歌人)さん

— 重信房子歌集『ジャズミンを銃口に』—

「ぬばたまの闇かきよせる掌の中で火を隠し喫<sup>く</sup>う戦場の煙草

上の五七五が、ゆるゆるした調べそのもの。これだけで、十二分に詩が成立している。と一下の七七で、緊迫した事実を、詩情なしでよす。上句と下句のバランスが絶妙である。禁煙喫茶店の中での歌ではない。ニューヨークは町全体が禁煙となっているところもあるらしい、ニューヨークが「戦場」と言われると、ま、答<sup>こた</sup>えに困る。この歌は、しかし、三十年ぐらい前の、パレスチナ周辺の現実を今に歌ったもの。

「閉ざされた房に見つけし風の道わが手づくりの風車<sup>かざぐるま</sup>まわす」

この歌は、近代建築願望ゆえに、ではないのか、ゲージツに近い管理主義ゆえに、収容されている者には、一切、直の空、直の樹木、直の匂いを見せない、触れさせない、嗅がせないという新築された東京拘置所内から生み出されている思想性を、ぐいと、こらえがたいのにこらえ、風車に託している。読み手は状況が分かると、怒る。泣く。そして、いじらしさに茫然とする。五年に一度ぐらいしか出会えない一首である、自称歌人にとっては、日本の極限風景を“遊ぶ、抒情がある。

(小嵐さんの文章は「図書新聞」に掲載されたものを、快くご了承いただき、転載させていただきます。)

【編集後記】その昔、連合赤軍事件が起きた時、「俺もこの事件に関わりある」と思った。あの、暗い人間否定の虚無が自分にもあると。警察に捕まることはない。法にも何ら問われない。けれども、俺の良心は黙ってはいないと。とは言え、持ち前の鈍感力。その後長く、私の罪意識は心のどこか隅っこの方に押しやられたままだった。／坂口弘さんの短歌を朝日歌壇に見出した時は衝撃を受けた。悪罵の限りを尽くし、なお世間が決して許しはしない連合赤軍事件。そのくせ、あたかもなかったことみたいに、触れたがらない、そんな連合赤軍事件が、当事者の手によって全国の茶の間に直接伝えられた。難関を突破してよくぞ入選できることと感心したけれど、もっと大きな感銘を受けたのは、こんなにも苦しんでいる人がいるという、そのことだった。何と誠実な人なんだろうと心動かされた。連合赤軍事件とは、坂口さんの苦しみにありと思った。彼一人苦しませるわけにいかないとも思った。／若松孝二監督の映画「実録・連合赤軍事件」は坂口さんの「朝日歌壇」短歌以来の快挙だった。この映画を作ることは、それ自体、いろんな意味で、大きな闘いだったに違いない。映像表現としての歯切れの良さは、連合赤軍事件というものをまるごと自分ひとりの肩に担い切って映画を作った、監督の気概からきているものなのだろう。／連合赤軍事件は人間を信じることの闘いとして大きな課題を提供してくれる。あの映画には全編を通して、人間を励ましてくれるあたたかさがどこか底流のように流れているが、それは、若松さんが、人間を信じる闘いを果敢に闘っているからだろう。というより、そのために映画を撮ったのだ。“映画という武器がある限り、俺は人間を信じることができる”若松さんはそう言ってるような気がした。／坂口さんの短歌から一首。「犠牲者らが生き返りたれば言ふならむされたるリンチに逆襲せむと」（歌集：『常しへの道』） 生き返ってほしいと、私も切に願う。生き返った姿を夢想もする。が、その姿とはリンチに逆襲するようなものではない。では、どんな姿なの……？それは坂口さんに言ってほしい。坂口短歌に詠んで、坂口短歌で、犠牲者らを生き返らせてほしい。／次号5号は10月刊行の予定です。重信さんへのお便り、投稿等、お待ちしております。9月中にお願いいたします。（森本）

価格は1冊300円です。なるべく年間購読をお願いします。送料込みで、年会費は2000円です。

（郵便振替口座 00920-2-169764 さわさわの会）

連絡先—〒635-0061 大和高田市磯野東町3-27 森本忠紀

Tel/Fax 0745-22-4002